

中華人民共和国（上海）滞在記

人文学部教授 松浦 崇

2004年4月から一年間、私は長期在外研究員として中華人民共和国（以下「中国」と呼ぶ）上海市に滞在する機会を得た。「天命を知る」べき年齢を超えた私が単身で海外生活を始めるには勇気がいったが、多くの人たちに助けられて、恵まれた生活を送ることができた。

上海に住む

私が在外研究の場所に選んだ「復旦大学」は、北京大学と並ぶ名門大学であり、文科系のレベルは特に高い。陳尚君先生をはじめとする中文系（中国文学科）の先生方と面識があり、復旦大学には「中国索引学会」の本部がある。上海を数十回訪れて親近感をもつ私は、迷わずこの地に住むことを決めた。

上海には福岡大学の文系センターのような16階以上の高層ビルが4000あまりもある。その数は昨年末にニューヨークを抜いて世界一を記録した。私が一年間住んだ部屋も、上海の中心地に近い28階立てのマンションである。24階の私の部屋からは、世界屈指の88階立ての金茂大廈もよく見えた。春節の夜、上海の街中が爆竹と花火の煙で真っ白になった異様な光景は、今でも目に焼きついている。

戦前ここには日本人租界があった。魯迅公園・魯迅故居・多倫路文化名人街・四川北路などが近くにあり、バス停4つで上海の名所「外灘南京路」へ行け、復旦大学へも20分位の便利な場所である。89平米の広い部屋の家賃は月3200元（約4万円あまり）であった。炊飯器や

洗濯機の使い方も知らなかった私は、ここで一年間生活するため、さっそく家政婦を雇った。27歳の若い家政婦と彼女の友人たちは、よく私の面倒をみてくれた。特別に中国語のレッスンを受けなかった私も、彼女らと毎日話すことで会話が身についた気がする。

復旦大学

復旦大学は、1905年に設立された国家教育委員会直属の重点大学である。上海市北部にある広大なキャンパスには、アカデミックな雰囲気があふれている。人文学院や経済学院などの8カレッジ、34学部、21の研究センター、29の研究所を有する伝統と由緒のある大学である。

復旦大学は今年創立百周年を迎える。大学付近は数年前から大工事中で、正門前の邯鄲路と五角場は、将来上海の副都心として大発展するであろう。

復旦大学では、陳尚君・楊明・駱玉明・呉格・査屏球先生らの演習や講義に参加した。若い大学生に混じって講義を受けるのに恥じらいもあったが、久しぶりに教える側から教えられる側に回って、多くの啓発を受けた。とにかく復旦の先生方はよく勉強されている。日本の中国学のレベルは高いが、本家の中国における中国学は、質・量ともに日本をすでに凌駕していると実感した。

学術調査と学術交流

在外研究中、上海を離れて、南京・宣城・当

塗・馬鞍山・蒙城・渦陽・亳州等の学術調査をした。特に、安徽省北部の渦陽に残る嵇康（3世紀の人で、竹林七賢の一人）の墓を調査した日本人の研究者は、私が初めてであろう。謝朓や李白にゆかりのある宣城（安徽省南部）や、台湾に隣接する廈門（福建省）なども印象深い場所であった。

また、曹旭（上海師範大学）・胡大雷（広西師範大学）・王雲路（浙江大学）・侯漢清（南京農業大学）・王同策（吉林大学）・林仲湘（広西大学）・張健（北京大学）・王彦祥（北京印刷学院）・陳東輝（浙江大学）先生など、中国文学や文献学の著名な研究者たちとお目にかかり、学術交流を深めた。こうした貴重な経験は、今後の研究と教育に大いに役立つであろう。

中国索引学会

私が上海で一番お世話になったのは、復旦大学の図書館に本部を置く「中国索引学会」の方々である。

中国索引学会は、索引の研究と編纂を二大柱とする学術組織であり、先進各国には、「イギリス索引家学会」・「カナダ摘要・索引学会」・「アメリカ索引学会」・「オーストラリア索引家学会」などの学会が存在する。

私は2000年3月に、日本人で唯一この学会に参加して名誉理事の称号を与えられ、2003年11月に南京で開かれた学会の総会で、「日本における索引編纂の状況」というテーマで発表した。

1991年創設の「中国索引学会」は、1977年創設の「日本索引家協会」よりも遅れたが、1200名の会員数を有する全国規模の組織である。残念なのは、「日本索引家協会」が1996年に解散してしまったことで、情報化の時代に対応するため、「日本索引学会」の創設は急務である。

毎月開かれた定例理事会や、6月に杭州（浙江省）で開かれた全国理事会、11月に廈門（福建省）で開かれた年会にも参加し、索引の過去・

現在・未来について考える良い機会になった。

中国索引学会は、私の索引学研究を全面的に支援してくれた。そのおかげで、漢・三国・晋・宋・齊・梁・陳・北魏・北齊・北周・隋の各時代の詩歌の一字索引をすべてパソコンのCDに保存することが出来た。その文字数は537万字にも及ぶ。まさに索引史に残る快挙である。索引学に関する文献収集も300篇に達し、今後の研究に役立つ貴重な財産を持ち帰ることができた。

また、索引編纂自動化の研究を開始した。私が代表者となり、日本・中国・韓国の索引学・漢字学・情報学・印刷学・出版学の泰斗を総結集する一大プロジェクトである。

反日運動

上海を離れる日が近づいた3月末、一年間住み慣れたマンションの部屋を出て、何度も歩いた南京路に立ち寄った夕暮れ時、急に涙があふれてきた。中国でお世話になった心優しい人たち一人一人の顔が浮かんできたからである。

帰国して二週間目のことだった。上海で激しい反日運動のデモが起こったのは。総領事館や日本料理店に投石するテレビの画面を見ながら、裏切られたような悔しさがこみ上げてきた。

貧富の差は大きく、いわゆる「民度」も高くない。盗まれたり騙されたりしたことも、中国で何度かあった。しかしながら、我先に地下鉄に乗り込もうとする人も多い反面、高齢者にすすんで座席を譲る若者が多いのも、中国である。

日本の実情を知らない中国人の反日運動のため、多くの日本人が中国嫌いになりつつある。しかしながら、われわれ日本人は中国の実情をどこまで知っているだろうか。一年間中国にいた私でも、中国のことがまだ分からない。

「人の己を知らざるを患えず、人を知らざるを患う」とは孔子の至言である。いわゆる「相互理解」の必要性を痛感した在外研究であった。

チューリッヒ滞在記

薬学部助教授 能田 均

平成16年3月末から1年間、長期在外研究員として、スイス連邦工科大学チューリッヒ校に滞在する機会に恵まれた。

世界一住みやすい都市

スイスと言えば、ユングフラウヨッホ、マッターホルンに代表される美しいアルプスの山々、更にはアルプスの少女ハイジの国、チーズフォンデュ、チョコレートなど牧歌的な観光のイメージが先行する。しかし、スイスは26州からなる連邦国家で、州により祝日や小学校の休業年限まで異なるほどの強力な自治権を持っており、場所場所で多彩なスイスを体験できる。

スイス北部チューリッヒ州の州都、チューリッヒ市は人口約35万人、スイス最大の都市で、スイス観光の玄関口、銀行・保険会社が立ち並び金融の街、高級ブランド店が並び商業の街、スイス連邦工科大学（ETH）、チューリッヒ大学がある学問の街、など色々な顔を持っている。また、チューリッヒは、ある調査機関（Mercer）の“住みやすい都市（Quality of Living）”ランキングでここ数年 No. 1 を続けていることをご存じだろうか？この調査では、ニューヨークを基準に経済、消費、住居、医療、自然環境、交通、安全、レジャー、教育などの面から評価する。1年間滞在して、確かにこのランキングには納得した。歴史が感じられる街はきれいに掃除され、緑も多く、交通は列車、トラム（市内電車）、バスが網の目のように整備され、かつ、今や日本より遙かに安全である。唯一の“住み

にくい”ところは、物価高であった。手取り給料の都市別ランキングでもチューリッヒは、世界1位である。日本の約1.5倍。特に食費、居住費が高いので、生活するのは大変である。しかし、食材としては、水、野菜、肉、チーズ、パン、ワインなどは素晴らしく、またチョコレートは絶品であった。

日常生活では、当初、ほとんどのお店が日曜閉店なのに驚いた。休日に市中心部に行ってもメインストリートは閑散としている。法律で一部の店舗以外での休日営業が禁止されている。しかも平日でも18時頃には店が閉まる。コンビニや自販機もない、等でとても不便に思ったが、しばらくすると別に気にならなくなった。それより、休日は自然に触れて過ごす方が気持ちが良いし、夜はワインでも飲んで、ゆっくりと時間をかけた食事をした方が楽しいし、健康にも良い。春には、アパート裏の森の中の遊歩道脇に群生する行者ニンニクを摘んで、炒め物、餃子などにして堪能した。みつばを摘んできたり、ベランダには花や青じそを植えたりもした。田舎回帰という訳でもないが、自然と共存できているという安心感があった。やっぱり、自分にとって“住みやすい都市”だった。福岡とおなじくらいに。

スイス連邦工科大学チューリッヒ校 センサー研究所

スイス連邦工科大学チューリッヒ校（Eidgenössische Technische Hochschule Zürich; ETH

Zürich)には、日本でいう工学部、理学部、農学部、薬学部があり、約1万1千人の学生が学んでいる。今年(2005年)は、ETH Zürichの創立150周年であり、また、同校ゆかりのアインシュタイン(同校で学び、同校に2度就職し、ついでに1度は入試に失敗している)にちなんだ“世界物理年”ということもあり、様々なイベント(公開講義、各種学会)が企画されていた。

私の研修先のセンサー研究所(Centre for Chemical Sensors and Chemical Information Technology)は、形式上は薬学部に所属していたが、薬学部本体とは別の場所にあり、教授の給料を含めて全ての運営は外部資金から調達する必要があった。従って、研究は全てプロジェクト志向で、教授は、研究テーマの考案、資金調達のための申請書類作成、各人の研究の把握と指導、アドバイザー契約のある民間会社への指導、プロジェクト報告、資金管理等で多忙を極めていた。研究室には大学の職員はおらず、ヨーロッパ各国から来たポスドクまたは私のような立場のゲスト研究者が研究を行い、若干の学部生が1年間配属される。ポスドク研究者は、特定のプロジェクトのために雇用されるので、その終了とともに雇用関係も終了する。そこで研究を続けるためには、研究者が新たなテーマを提案し、プロジェクトを立ち上げ、資金を獲得する必要がある。私が滞在していた1年間の間に、数名の研究者の出入りがあった。このような研究室なので、起業家精神も旺盛で2つのスピンオフ会社が設立された。いずれも研究室と交流があり、社員を見かけることも多かったが、残念ながらその一つは昨年夏倒産した。大学発ベンチャーは日本でも盛んになっているが、その厳しさもまた目の当たりにすることが出来た。

私は、この研究室で研究するにあたり漠然としたテーマ“微小領域におけるセンシングシステムの開発”しか考えていなかったの、研究

するに当たって、使える装置や方法論、研究できる期間を考慮しながら、具体的な研究テーマを考えることが最初の仕事になった。研究室のセミナーで2回のプレゼン、教授との3回の話し合いでテーマが決まり、“マイクロ電極を用いた微小領域におけるアセチルコリンのセンシング”研究が始まった。今までの自分の研究とは、異なる方法論なので、新鮮でおもしろい反面、わからないことも多く、通じない英語で汗をかきかき基礎を教わった。ないものは自分で作る、工夫する、ものづくりの基本も教わった。肉眼で見えないような小さな電極がちゃんとアセチルコリンに反応する、学生時代のような感動も味わった。

研究室では、コーヒータイムに集まり、コーヒーを飲みながら、自分の国の歴史、文化、政治、スポーツ、宗教、など実によく話す。彼らは、自分の国のみならず、他国のこともよく知っている。例えば、他国の皇室や閣僚の名前を知っており、歴史も熟知している。私には語学力以上に、このような知識がないことを恥ずかしく思った。海外に滞在するときには、事前にその国・地域について勉強しておく、コミュニケーションが豊にふくらむことは間違いない。

チューリッヒで暮らした一年間は、研究のみならず自分の生活を見直す意味でも有意義であった。このような貴重な機会を与えていただきました福岡大学の皆様へこの場をお借りしてお礼申し上げます。

チュービンゲン滞在記

法学部助教授 生田 敏 康

2003年8月より1年間、本学の長期在外研究員としてドイツ・チュービンゲン大学法学部に留学する機会を得た。以下はその間、見聞きし、感じたことのささやかな記録である。

チュービンゲン到着まで

チュービンゲンはドイツ南西部、バーデン・ヴュルテンブルク州の一地方都市である。フランクフルトから州都シュトゥットガルトまでICE(InterCityExpress:ドイツ鉄道の高速列車)で1時間半、そこからローカル線乗り継いで1時間弱で着く。人口は約8万人、大学を中心に栄えた町であるとともに中世以来の古い町並が残る観光都市でもある。

8月20日にフランクフルトに到着し、翌日、中央駅からシュトゥットガルト行きのICEに乗るべきところ、まったく行き先の異なる列車に誤乗車し、結局、北ドイツのハノーファーまで行って引き返したのでチュービンゲン到着は6時間遅れの午後7時過ぎになり、出迎えに来てくれたシュレーダー教授夫妻には大変な迷惑をかけることになってしまった。原因はもちろん、よく確認しなかった当方のミスであるが、宥恕されるべき点があるとすれば、遅延して到着したハンプルク行きの列車をシュトゥットガルト行き列車(これも遅延していた)と誤認したことにあつた(直前に発着番線が変更されるという不幸も重なった)。最近、ドイツにおける鉄道の遅延が甚だしく、しばしばメディアで取り上げられ、社会問題になるほどであるが、

まさかその洗礼を受けるとは予想さえしなかった。

チュービンゲンにおける生活

最初からケチのついた在外生活であったが、その後はとくに事故やトラブルに遭うことはなかった。たしかに滞在資格(ビザ)の取得は懸案であったが、これは問題なく取ることができた。ドイツでは日本人の場合、事前にビザを用意する必要はなく(というか3ヶ月以上のビザは事前に取れない)、入国後に取得することになる。ビザ取得に関しては様々な苦労談を聞かされていたので不安であったが、結局、形式的な審査のみで、すぐに発給してくれたのは逆に拍子抜けしたぐらいであった。研究目的の滞Inの場合、受入先のProfessorの招聘状さえあれば(ドイツにおけるその権威からして)ほとんど無条件に与えられるように思えたが、滞在地、担当者、その時々政治・国際事情によって異なるので一概にはいえないようだ。

事前に外国人研究者用の宿舎を手配してもらっていたので、よくあるアパート探しの苦労を経験しないで済んだのは幸運であった。しかも若干古いものの、大学まで徒歩10分弱、約13畳大の居間、2つのベッドのある寝室のほか台所と浴室・トイレからなり全室家具付、家賃は月400ユーロ(約5万円)というかなり恵まれた住環境であった。ただ、入居後、賃貸人(州財産局)からまったく連絡がなく、家賃を払わないまま半年近く過ごすことになったのには困

惑した（こちらに非はないので解約されることはなかったが、ようやく3月になって請求書が来て、無事、家賃を払うことができた）。また、電気と水道（ちなみに日常生活でガスを使うことはほとんどない）に関して前の居住者が解約の手続をしていなかったらしく、料金が未納で直ちに支払わないと供給をストップする、という「警告書」が来て青くなったことがあった。11月末のドイツで凍死するのはたまらなかったので、あわてて電気・水道局で手続をして事なきを得たが、異国の地でこのような事態に遭遇するのは胃の痛くなる思いであった。

中年になってからの海外生活はたしかに辛いものがあった（海外生活どころかそれまで国外に出たことすらなかった）。最初は島流しにあったような気分だった。家族も知り合いもいない、ほとんど会話のトレーニングをしてこなかったので全然言葉がわからない、最後まで孤独との戦いであった。正直なところドイツ語は片言以上には上達しなかった。そこで、本格的なコミュニケーションは断念し、ひたすら帰国するまでは病気やケガ、トラブルに巻き込まれないことを最大の目的とし、あとはドイツ社会を観察することに専念した（なお、チュービンゲンはなまりの強い地域であり、地元民の会話を正確に聴き取ることはほとんど不可能に近い）。

ドイツおよびドイツ人について

ドイツについては近年あまり良く語られないことが多い。すなわち、不況で失業者があふれている、また、ネオナチが闊歩し、危険である、等々。しかし、これらは一面的な理解である。実際に体験したのは概ね治安がよく豊かな社会であり、私が接したドイツ人は陽気で親切で、かつ義理堅い愛すべき人たちであった。

ドイツ人の気質として挙げなければならないのはある種の義侠心というか相互連帯・扶助の精神である。困っている人がいると必ず誰かが

助け、逆に困っている人も気軽に援助を求め、それを当然のこととして受け止めているところがある。車椅子やベビーカーを見知らぬ客どうしが協力しあってバスに引き上げる光景は感動的ですからある。そして、それを支援するような社会システム及びインフラが存在するのも見逃せない。

また、ドイツ人ほど律儀にルールを遵守する国民はいないであろう。たとえば信号のない横断歩道を歩行者が渡ろうとしている場合、（当たり前のことであるが）自動車は必ず停止する（横断歩道で一時停止しなかった車に対し、歩行者が激怒し、ボンネットを拳で殴ったのを目撃したことがある）。先行する自転車を後続の自動車がクラクションを鳴らして煽るということもなく、自転車は堂々と道の真ん中を走っている。すなわち、よい意味でドイツ人は権利と義務の体系を体得しているといえよう。

ドイツは日本のようなストレスに満ちた社会ではない。冒頭にも記したように列車の遅れは日常化しているが、それに対してイライラするというような雰囲気はない。ドイツ的にいえば2、3分の遅れは誤差の範囲内である。そもそも秒単位の正確さが要求されるような過密ダイヤは存在しない。

冬が長く、若干寒いのと、日照時間の短いのを我慢さえすれば、ドイツは自然災害が少なく、過ごしやすいところだといえよう。逆にドイツから見ると、日本は経済大国を自任するには地震、台風等の自然災害のリスクが大きすぎるように思われる。また、単調で変化に乏しいがよく手入れされた山林や田園の風景、整備された自転車道、（厳しい建築規制によって維持された）重厚かつ美しい町並、活気に満ちた旧市街の広場の光景は、わが国のように人口や資源が過度に特定の地域に集中し、一方において無秩序にスプロールの開発の進んだ都市と他方において人口減と空洞化により疲弊した地方が

併存する、というアジア的光景とは対照的である。

しかし、反面、欲望を刺激するものが少なく、コンビニもない、(閉店法により)店舗は午後8時には閉まり、日祝日は営業しない、およそモノトーンに近い世界でもある。また、人種的・民族的多様さ(トルコ人はもとより多いが、最近ではアフリカ系、アジア系住民も目立つ)に伴う軋轢も増えている。東西ドイツの経済格差は依然として解消されていないし、EU拡大による東欧からの安い労働力・製品の流入は新たな脅威となりつつある(最近では停滞する経済を活性化するために閉店法の見直しが検討されているし、また、国際的な競争力を確保するためエリート大学を創設し、予算を重点的に配分する試みもなされようとしている)。

これはどちらがよいという問題ではない。いずれにせよ、ドイツは日本やアメリカとは異なる途を選択したということであり、その基本的な方向は将来も大きく変わることはないだろう。

おわりに

長かった留学生活も終わりを告げた。結局、この間、何を得られたのか忸怩たる思いがある。ようやく覚えた片言のドイツ語もほとんど忘れかけている。ドイツ滞在中に6kg体重が減ったのに半年でもとに戻ってしまった。そういえば、ドイツでは1回も風邪をひかなかったのに帰国してからしっかりひいた。

